

## 新入庫本

### 子どもの本

『ぎゅうって』(ひさかたチャイルド)『あとでまたものがたり』(岩波書店)『月からきたトウヤーヤ』(岩波書店)『森のお店やさん』(アリス館)『ロンド国物語1』(岩崎書店)『ぼうしをかぶったオニの子』(あかね書房)『ぼくのいのち いのちのえほん7』(岩崎書店)『世界のなぞかけ昔話1～3』(晶文社)

### <おかあさんに>

『えほん日本国憲法 しあわせに生きるための道具』(明石書店)『子どもの本の歴史 上下』(岩波書店)

### 大人の本

『愛のために死ねますか「ゆるす」ということは何か? 「人間の関係」を取り戻すための珠玉の対談』(中経出版)『さらば財務省!』(講談社)『聖家族 生まれちゃったんだよ、俺たち』(集英社)『団塊の<青い鳥>』(現代書館)『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』(筑摩書房)『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』(春秋社)『新三河物語 下』(新潮社)『出星前夜』(小学館)『謎手本忠臣蔵 上下』(新潮社)『風のガーデン』(理論社)『サン=テグジュペリ伝説の愛』(岩波書店)『妻との修理』(講談社現代新書)『わたしの源氏物語』(集英社文庫)『源氏物語の男君』『源氏物語の女君』(日本放送出版協会)

☆今月はちょっと重いものが集まりました。

文庫あれこれ◆真冬のような冷え込みが襲ってきました。◆小学校のクラス会が熱海でありました。一泊して、参加者15名がマイクロバスで沙羅の樹文庫を見学に来てくれました。50数年まえにすっと戻れるのですから小学校友だちとは不思議なものですね。モア美術館に10数年ぶりに行き、20年ぶりくらいに城ヶ崎海岸(家から遠い方)を散策しました。◆大室高原の文化祭はいかがでしたか?文庫のポストにもう来年の「アートフェスティバル」のお知らせが届いていました。◆トンボ帰りで東京に戻り、荒川区の図書館でおはなしの4回講座の最後に参加者におはなしをひとりひとり語ってもらいました。いつものことですが、初心で懸命に語る人のおはなしは胸を打ちます。その度に伝えたい心を忘れてはいけなく強く思います。10月の「秋の夜長のおはなし会」は元気な85歳が語ってくれました。◆本は新刊、寄贈本とどんどん増えているのですが、なかなか管理ができません。◆今年こそは蔵書リストを作り上げようと友の会のみなさんに下書きしていただいているのに、入力が…。少しほかの仕事を割愛してとは思いますが。◆世の不景気風に、空までどんより、雨降らないでほしいなあ。あれっ束の間青空が! 皆さん、お風邪を召しませんよう。(西村)

## “ “これからの催し物のお知らせ” ”

### クリスマスおはなし会+お楽しみ会

日時 12月21日(日)午前10:30~12:30

おはなしと手遊び(文庫のおばさん+会員)

みんなでいっしょに楽しいおやつと軽食

そして

プレゼント交換

(ひとりひとつ300円程度のプレゼントをご持参ください)

### ☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆12月は通常の日曜日(20、21日)です。

◆来年1月は通常の日曜日(17、18日)です。

◆文庫の時間:通常、土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

◆毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。

午前10:30~11:00

◆文庫開館日は毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。

### 《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》 みんなで勉強会

★12月は20日(土)です(11~13:00)。

クリスマスおはなし会のリハーサルです。

本はみんなのもので、みんなが気持ちよく読めるように大切に読みましょう。

## 沙羅の樹文庫便り

# No.27

(2008年11月号)



『源氏物語手鑑』(土佐光吉筆 和泉市久保惣記念美術館蔵)

今年は源氏物語千年紀ということで、さまざまな分野で、いろいろな催しがあり、本も多々出版されました。

介護のかたわら、ひとりの主婦が18年かけて完訳した現代語訳8巻が評判になっています。

(上野栄子訳 日本経済新聞社)

### 今月は、こんな本を読んでみませんか!

十一月の扉 (高樓方子作絵 リブリオ出版)



親の転勤でひとり北海道に残った爽子は、十一月荘に住み始める。そこに住む世代の異なる女性たちとのふれあいのなかで、爽子は一冊のノートに物語を綴っていく。日々が静かに過ぎてゆき、ナナカマドの実の赤が心に染み入ります。

10月にお借りした本のうち、たまたま2冊は癌による死に関連したものであった。現在日本人の三分の一は癌で死ぬという。たまたま文芸春秋8月号の立花隆氏とノーベル物理学賞にもっとも近いと見られていた戸塚洋二氏の対談を読んで、戸塚氏が絶望的な病状に最後まで透徹した科学者としての対応をされていることにショックを受けていたところであり、改めて癌で死ぬということを考えさせられた。(ちなみに戸塚氏は7月10日、雑誌の対談の1ヶ月後、肺・肝臓・脳などに拡がった大腸癌で死去された。立花隆氏は今膀胱癌の治療中である。)

①「**そうか、もう君はいないのか**」城山三郎著 新潮社

著者城山三郎氏は、夫人の容子さんが2000年2月に肝臓癌で亡くなってから7年間生きて、2007年に亡くなったが、これは亡き妻との出逢いから死を看取るまでの記録である。似たような本では江藤淳氏の著書「妻と私」がある。不思議なことに、夫人の癌が発見されたきっかけは、いずれも夫人が車を運転していて事故をおこしたことなのだ。江藤夫人は肺癌が、城山夫人は肝臓癌が(おそらく)脳に転移し始めていたのだと想像される。両氏とも非常な愛妻家であり、江藤氏はその後脳梗塞をわずらい鎌倉の家で自死されたが、城山氏は妻の死を認めることを自分に許せなかったのか妻の死後自宅には寄り付かず、仕事場のマンションに住み着いて最後は瘦せ細って肺炎で亡くなったという。

②「**蟹と彼と私**」荻野アナン著 集英社

荻野アナンは才気煥発な人である。どうしてこんなに頭が回転するのか、その切れ味の匂気味よさ。

しかしこの本は15年間の「恋人」パタさんに食道癌が見つかり、大手術のあと抗がん剤投与や放射線治療などを経て死にいたるまでの惨憺たる看取り、それも詳細を極めた地獄の記録なのだ。才気煥発なアナンに対し、

パタさんは「渾身の優柔不断が身上」という冴無い中年男で、この組み合わせが、地獄の闘病記・看病記を何故かコミカル調で進めさせる。癌の中でも手術がもっとも大規模で困難なのは、食道癌らしい。その大手術に失神しそうになりながらも最後まで立ち会ったアナンの度胸には驚いた。手術前には人に誘われて妙な薬に大金を投じたり、3万5千円の「回数券」で祈祷してくれるインチキ和尚にひっかかったり、ガンにかかった患者がやる愚かな救い求めも経験。その上アナンは自分の仕事をこなしつつ、90歳を越して呆けてしまった父親、その看護に倒れる母の面倒も見なければならず、一方で突然病院にパタさんの昔の女が現れるわ、なんやかんやで自分も疲労困憊、とうとうぶっ倒れて、看護婦に「あなたの方が心配」と言われる始末。

こういう地獄の日々をあくまでコミカルでリズムカルな筆致で書き切ったアナンには感嘆するしかない。

③「**触れもせで一向田邦子との20年**」久世光彦著 講談社

「うーん、こん畜生、うま過ぎるよ！」と唸りたくなるようなうまいエッセイだ。何を書かしてもあっと驚くほどうまかった向田邦子を回想した久世光彦の文章が、である。寸分の隙も無いくせに色も匂いも洒落もある文章だ。間違いなく久世は向田に『ほ』の字だったろうが、生涯独り身だった向田の方も久世が好きだった筈だが、しかし二人はとうとう「触れもせで」だったというところが、一番粹なところである。

向田邦子も乳癌を患ったと書いてあるが、死んだのは台湾観光旅行の航空機墜落事故でであった。久世光彦も一昨年に亡くなった。(奥野 禎一)

★はじめて男性会員の紹介文を掲載させていただきました。心そそられます。嬉しいかぎりです。

『**やまんば山のモッコたち**』(富安陽子・作 降矢なな・絵 福音館書店、2000)

食いしん坊におすすめの、食欲の秋にぴったりな1冊ご紹介します。

もとは1986年に出版されましたが、新装版では一話増えているようです。

やまんばの娘・まゆと人間の男の子・啓太との交流を通して、やまんば山の四季の暮らしが、生き生きとあたたかく描かれる連作集です。

やまんばは、さばさばした女の人だし、まゆだって、ふつうのまっすぐな女の子。特別なのは、怪力であることと、雲をあやつって乗り物にしていること。そんなやまんばを中心に、気のいいモッコ(山に住む妖怪のような生き物)たちが、おたがいを尊重しながら共存しています。

なんととっても楽しいのは、山の暮らしと食べ物の描写!たとえば冬の柏林はやまんばの冷蔵庫。雲に乗って山のふもとの柏林にびゅうっとおりていき、うろにしまつてある干しきのこや、ヤマモモのジャム、栗の蜜煮などを、かごやビンに詰めて取ってくる、といった調子。四季それぞれのエピソードが、それはそれは魅力的です。

私の一番のお気に入り、まゆの誕生会をする秋のお話。ごちそうを準備した13個のかまどを順番にのぞいていく場面では、魚の蒸し焼きや、きのこのシチュー、栗の蜜煮、きのこごはん、川魚のフライ…。秋の味覚がたっぷりと描かれ、読んでいただけで幸せな気分になります。

連作集ですので、ちょっとずつ読めるのもこの本の良いところ。お好きな季節のお話だけでも、機会があればぜひ一読ください。(田代 翠)

★文庫にも来た子どもの本の編集者からの寄稿です。